

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

マレーシアのタイ人たち 北部集落に見る暮らしの変遷

黒田景子 (鹿児島大学法文学部教授)



クダ州の集落にあるタイ語学校の教員と生徒たち (筆者撮影)

この数年、マレー半島北部クダ州のタイ系仏教寺院とそのコミュニティを探訪して調査している。半島北部州に行くにあちこちにタイの痕跡がいろいろと残っているのである。クランタン州トゥンパットの大きな寝釈迦像や、ペナン州ジョージタウンのタイ寺院、ビルマ寺院などは観光スポットになっているので、ご存じの向きも多いであろう。

そもそも、マレー半島の北部、クダ、プルリス、クランタン、トレンガヌの各州は 1909 年までは長らくタイ (当時はシャム) に属していた。とはいえ、タイの軍力を恐れた各スルタン (州王) がタイの王に朝貢すると言うものでマレー半島中部の交易拠点を押さえたいタイの意向による形式的なものであったと言われている。

ところがその後もタイのブーケットとペナンは汽船航路で結ばれて意外に関係が深い。ペナンやクダ州の華人たちの中には、親がタイ人だったという人をしばしば見かける。

この場合のタイ人というのは、現在のタイ国民だけを指すのではない。実は人口的には圧倒的に少数ではあるが、マレーシアが英国植民地になる以前から北部州の各地にタイ系の住民の集落が散在しているのである。

特にクダ州にはこのタイ人 (自分たちではシャムと称する) の集落とタイ上座仏教寺院が 42 もあり、マレーシアで最も多い。都市部にあるものは少数で、そのほとんどはクダ州の内陸部の隔離した農村にある。その数は 3 万人といわれる。そのあたりではタイ語に由来する地名が多く残り、ほとんどが農民であるシャム人たちは自分たちの寺や村の由来を、200 年から 500 年以前の移住であると語る。コミュニティでは南タイのタイ語方言会話が主で、マレー語を理解しない層もいる。

20 世紀の前半までは、これらのシャム人と地域のマレー人との祭りでの交流も緩くではあるが存在していたらしく、なかには同じく 200 年以前に南タイから移住してきたマレー系住民でサムサムといわれるタイ語話者ムスリムとの婚姻もあった。マレーシア初代首相、トウク・アブドゥル・ラーマンのエッセイにも記載がある。

いくらクダ州がマレー人ムスリムの多い地域であると言っても、ひそかにシャム人仏教徒のコミュニティは多数存在し、今もその寺々は地元の人々によって信仰と村の中心となっているのである。

ところで、この仏教寺院群であるが、3 年をかけてすべての寺院調査をしてみたところ、さまざまな場所で仏教寺院巡りをしている華人の家族に出会った。タイ仏教寺院は車でなければ発見できないかなりの奥地にあるため、ここを探訪するものは当然車である。ペナン、アロースターのほかクアラルンプールやシンガポールからも華人が多く訪れ、僧侶に昼食を捧げたり、まじないをしてもらったりしている。中にはほとんど華人化している寺院もある。華人たちがタイ寺院を回るのは仏教としては同じ、という感覚が主であり、中には巡礼的なレクリエーションとして楽しみにしていると語る。そして都市部の寺院には華人の寄付によって建てられた納骨堂があり、ムスリムの国での火葬と墓の場所という問題がタイ仏教寺院に華人を引きつけている事情も伺わせる。

ひっそりと暮らしている村も多いシャム人たちであるがこの数年、シャム人協会をつくって活発に政治活動をするようになった。少数ではあるが、彼らは立派にプミプトラ (マレー人と先住民) であり、非ムスリムのプミプトラとして最大与党 UMNO (統一マレー国民組織) との繋がりを強めるキャンペーンに参加している。PAS (全マレーシア・イスラム党) が大きな力を得ているクダならではの現象かもしれない。

< 筆者紹介 >

1957 年、京都市生まれ。大阪外国語大学外国語学科タイ語卒業。大谷大学大学院文学研究科博士課程 2 年中退。マラヤ大学で研修の後、大阪外国語大学外国語学科非常勤講師などを経て現職。専門はタイ、マレーシアの歴史地域研究、南部タイ紛争やタイ・マレーシア境域の北部クダ州でのフィールドワークによる地方歴史研究や民族移動共生などが近年の関心領域。日本タイ学会理事。東方学会理事。日本マレーシア学会 (JAMS) 理事。